

【2021年度 学生交流委員会 事業計画】

学生交流委員会

委員長校 : 神戸親和女子大学

副委員長校: 甲南大学

委員校: 芦屋大学、関西国際大学、関西学院大学、聖和短期大学、甲南女子大学、神戸大学、神戸海星女子学院大学、神戸学院大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女学院大学、神戸女子大学、神戸女子短期大学、神戸常盤大学、神戸常盤大学短期大学部、頌栄短期大学、園田学園女子大学、園田学園女子大学短期大学部、姫路大学、姫路獨協大学、兵庫大学、兵庫大学短期大学部、兵庫県立大学 計24校

<目的> 委員会全体の「総論的な目的」(ねらい)

学生交流委員会では、学生プロジェクト事業、学生災害ボランティア・ネットワーク事業の2つの事業により、コンソ加盟大学の学生に対して、他大学の学生との交流、自治体・企業など地域社会との交流、被災地との交流、社会人との交流等の場を提供することにより、参加した学生に様々な交流を促し、この経験が大学4年間の学生生活に資するよう、各種プログラムの内容の充実を図り、実施したいと考える。

<内容> 全体から見た、小プログラムの組み立て方について

学生プロジェクト事業は子どもや保護者、他大学との交流事業として、「キッズフェスティバル」を実施する。学生災害ボランティア・ネットワーク事業は、阪神・淡路大震災を経験した地域として、学生が日常的な地域福祉や社会支援と災害時およびその後の災害支援とが連続性を持っていることを理解し、被災地での支援活動に取り組むことや復興支援の実情および今後の災害に備えた減災への取組みを学ぶことにより、日頃から主体性・自発性にボランティアや社会活動に取り組む姿勢を身につけ、被災地支援・復興支援や今後の災害に備えることを目的とする。また事業の実施体制として、ユニット制での実施を継続して実施する。上記2事業に基づく2ユニットのいずれかに全委員校が参加し、ユニットごとに企画立案から多くの加盟校が主体的に参画することにより、学生交流の実質化に繋げる。

<期待される効果> 下記すべてのプログラムを行うことで、得られる「総論的な効果」

学生交流委員会では、この2つの事業により、コンソ加盟大学の学生に対して、他大学の学生との交流、自治体・企業など地域社会との交流、被災地との交流の場を提供することができる。また参加した学生に様々な交流を促すことにより、学生自らが他大学の学生と協働し企画を実現することによる能力向上の機会を提供する。

	実施プログラム名称	予算額
①	学生プロジェクト事業「キッズフェスティバル」	800000円
②	学生災害ボランティア・ネットワーク事業	2400000円

【2021年度 学生交流委員会 事業計画①】

課題	地域で活躍できる人材の育成			
達成目標	リーダー(企画・運営を担える人材)の育成:50名 / 年			
課題を解決する取組概要	<p>(取組1) 地域(子どもやその保護者等)との交流を図るイベントを企画・運営し、異世代交流の体験を通じた幅広いコミュニケーション力、前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)を、実践によって身につけさせ、地域で活躍できる人材を育成する。</p> <p>参加学生には、地域の子どもの状況やその背景についても学ぶ機会を提供することにより、地域における子どもの現状(少子化等)と課題を踏まえた取り組みに繋げる。</p> <p>※「リーダー(企画・運営を担える人材)」</p> <p>イベントの参加学生のうち、実行委員として当該イベントに関する企画、各種調整・交渉、運営等を担った学生。</p>			
活動指標	参加団体数:15団体程度 / 年 参加者(親子)数:500名 / 年			
内容(結果)	<p>・実施内容</p> <p>学生プロジェクト事業は、「学生と子どものふれあいを通じた学生の交流」をコンセプトに据え、イベントの企画立案、イベントの運営等のマネジメントを行うことで、自ら考え行動する人材の育成及び企画力、創造力や運営力等学生が社会で求められる適応力を身につけることを目的として実施する。</p> <p>「キッズフェスティバル」と題し、「子ども」をテーマにイベントを企画、運営する。具体的には、子どもたち(キッズ)を対象とした、「スポーツ」、「音楽」、「食」、「あそび」、「ものづくり」等の小テーマを設定し、各大学から学生の参加を募る。</p> <p>学生リーダーの強化・充実に資するために、「リーダー養成のための講演」を2回程度実施する。リーダー養成はもちろんのこと、地域の子どもの状況やその背景等についても学ぶ機会とし、学生たちが地域における子どもの現状(少子化等)と課題を踏まえて取り組めるよう導く。</p> <p>・具体的な進め方など</p> <p>参加大学の運営スタッフ(3名程度選出予定)からなる実行委員会を編成し、本番に向け数回の実行委員会を開催(令和2年度実績4回)して、企画・運営等について話し合っ決めて行く。その学生たちを中心に各大学が連携し、協力して実施していくことで、企画段階から学生間の交流も深められると考えている。</p> <p>実行委員会で、大島剛教授(神戸親和女子大学)による「子どもたちとのつきあい方」の講演を2回実施予定。地域の状況やその背景についても学ぶ機会を提供し、地域における子どもの現状(少子化等)と課題を踏まえた取り組みにつなげられるようにしたい。</p> <p>なお、今後の情勢によっては、昨年度同様に動画配信の実施、Zoomでの実行委員会の開催も検討する。</p> <p>【開催予定】 日時 2021年12月5日(日) ※予定 場所 こべっこランド</p>			
新しい試み等(事業計画に記載)				
事業収支	収入	支出	収支	備考
	800,000円		800,000円	
自己評価	【対到達目標】		【対継続性】	
■自己評価基準(対到達目標)	4:当初計画を上回って達成 3:当初計画を達成 2:当初計画をやや下回った 1:当初計画を下回った	■自己評価基準(対継続性)	4:本プログラムは継続すべき 3:本プログラムは継続しても良い 2:本プログラムの継続には改善が必要 1:本プログラムは中止すべき	
理事会からの改善提案(次年度事業計画に反映)				

【2021年度 学生交流委員会 事業計画②】

課題	⑤地域の防災等を担う人材の育成－学生災害ボランティア・ネットワーク事業			
達成目標	「ひょうご災害・防災リーダー」認定学生数:50名(2021年度までの延べ数)			
課題を解決する取組概要	<p>阪神・淡路大震災の経験を有する兵庫県で地域の防災等を担う人材養成プログラムを実施する。</p> <p>コンソ加盟大学の学生と県内外の各団体が連携し、阪神淡路大震災の経験、教訓を学ぶ場の提供や東日本大震災や岡山豪雨災害等の現場での実際の支援活動に取り組み、被災地の復興支援の体験やそこから派生する防災への取り組みを学び、自主的且つ自発的に活動に取り組む学生を育成するとともに、災害・防災リーダーを養成する。</p> <p>・阪神淡路大震災とその後の復興の過程に関する学びと実質的なボランティア研修を踏まえ、現場のニーズに即したネットワーク活動を企画・実施し得る能力を身につける。</p> <p>・宮城県、岡山県等でのネットワーク活動の実施により、時間経過に伴う被災地のニーズの変化や復興の過程を学ぶ。</p> <p>・震災直後やその後の復興の過程を学ぶとともに、今後の防災・減災に向けて、何ができるのかを考え、実践に移すことができる「ひょうご災害・防災リーダー」を養成する。</p> <p>※「ひょうご災害・防災リーダー」 2年以上継続して活動に取り組み、リーダー研修の受講及び各グループ活動での実践的取組みを最後まで遂行した学生。</p>			
活動指標	プログラム参加学生数:250名(2021年度までの延べ数)			
内容(計画)	<p>・参加学生は、阪神・淡路大震災の経験、被災地支援、復興支援、災害と福祉の関連について、近年の大規模災害(東日本大震災、熊本地震災害・豪雨災害、岡山豪雨災害等)の事例から、それぞれの現地関係者との連携により、直接、被災地の現状と課題について学ぶ。</p> <p>それらの研修から災害の基礎等を学び、自ら何ができるのかを考え、現地ニーズも踏まえたネットワーク活動(被災地での交流活動等)を計画・実践する。最後の振り返りの会では、一連の活動から得た学びや経験を振り返るとともに、将来の大規模災害(南海トラフ地震等)に向けた防災・減災対策等についても学ぶ。</p> <p>前年度のコロナ禍でのオンラインでの活動の成果も踏まえ、対面の利点、オンラインの利点を併せたハイブリッドな活動プログラムを目指す。</p> <p>このプログラムの終了後、参加した学生たちが自主的にボランティア活動や交流活動に取り組むことを期待している。当プログラムに参加した学生に対して「学生災害ボランティア・ネットワーク事業 修了認定」を行う。</p> <p>・前年度の参加学生から学生スタッフを公募する。学生スタッフは、オリエンテーション、研修を受講後、一般参加学生とスタッフを繋ぐファシリテーターの役割を担い、活動をリードすることを期待している。</p> <p>現地の大学等との交流の担い手として、現地の大学が実施している活動(ボランティア・イベント等)に率先して参加するなど、被災地の課題と復興の現状について体感することを奨励する。</p> <p>一市民として「他人事を自分事として捉え、地域の課題解決に向けて取り組むことができる人材」になることを目標に当事業を主導する存在となることを期待したい。学生スタッフには「学生災害ボランティア・ネットワーク事業 学生リーダー認定」を行う。</p>			
新しい試み等(事業計画に記載)	・これまでの9年間、対面での活動を行ってきたが、前年度は新型コロナのため、オンラインのみでの活動となった。今年度は、対面の利点、オンラインの利点を併せたハイブリッドによる活動を志向し、当事業に取り組みたい。			
事業収支	収入	支出	収支	備考
	2,400,000円	2,400,000円		円

自己評価	【対到達目標】	【対継続性】	
■自己評価基準 (対到達目標)	4:当初計画を上回って達成 3:当初計画を達成 2:当初計画をやや下回った 1:当初計画を下回った	■自己評価基準 (対継続性)	4:本プログラムは継続すべき 3:本プログラムは継続しても良い 2:本プログラムの継続には改善が必要 1:本プログラムは中止すべき
理事会からの改善提案(次年度事業計画に反映)			